

「Gastric Anisakiasis in Japan」

ed. by Hajime Ishikura and Masayoshi Namiki

奈良県立医科大学教授
荒 木 恒 治

「Gastric Anisakiasis in Japan」と題して、アニサキス症の疫学、診断、治療について、企画集約刊行されたことは、大いに意義あることであり、並木正義教授、石倉肇博士に敬意を表する。

アニサキス症は海産哺乳動物(クジラ、イルカ、トド、オットセイなど)の胃内に寄生する線虫で、その幼虫が回遊海産魚類を第2中間宿主として寄生し、その生造りや、鰯、酢じめなど日本人の古来よりの風習の際に乗じて、ヒトに侵入し、胃や腸壁に穿入する厄介な病害を与えるものである。本症は1963年日本で報告され、北日本、日本海沿岸地方での発症が問題となったが、最近の流通機構の発達により、日本全国各地に広まり、沖縄でも本症が見られるようになっていいる。今や日本のみならず、日本食の欧米への進出普及により、本症が世界で大きな話題となってきた。こうした背景から、本書が刊行されたことの社会的意義は極めて大である。

アニサキス症は、かつてはアニサキス幼虫の胃壁穿入によって作られ

る腫瘍が胃癌と誤られ、胃部分切除標本の好酸球性肉芽腫様病変中の虫体検出より、本症と診断されたのも一昔前のことであり、今や臨床的に胃内視鏡の発達により、早期診断即治療が可能となり、年間国内では、3,000例を下らないと考えられる。

胃アニサキス症に関しての胃病変、そのX線学的所見、超音波診断などについて、病理組織学的所見を裏づけに、各専門家の記述を総括している。また現在、幼虫移行症を中心として寄生蠕虫症の寄生虫学的免疫診断の重要性が云々される。アニサキス初感染での診断は、時期的に見て抗体産生が不十分で、診断的価値を裏づけることが難しいが、再感染では重症度の指標として免疫反応の意義をもってくる。本書の中でも免疫電気泳動法での特異沈降線が明らかにされ、感染に対する抗体産生の経過が明らかにされている。最近バイオテクノロジーの進歩により、特異的なモノクローナル抗体によるELISAスクリーニング法の検討結果がよく窺える。現段階では、発症時期の免疫診断の有用性が論議

を呼んでいるが、結論に達していない。近い将来、本書に記述されたこれらの研究結果を基盤として、より確実な免疫診断法が解決される日も間近いものと思われる。

治療の面では、胃アニサキス症に関しては内視鏡検査の普及で診断即治療となるが、腸アニサキス症については術前診断はほとんど不可能で、開腹手術後摘出標本よりアニサキス幼虫を確認して診断されるのが現状で、これらの早期診断が先決で、外科的治療より特効的治療薬の開発により内科的治療が可能となれば、患者の負担が軽減されることを暗示している。

本書はこうしたアニサキス症の基礎的、臨床的研究過程が明確に示され、現況とあわせて今後対処すべき方向を提起している。

本症は日本人の食生活にまつわる生活習慣を加味した社会的背景より考え、なかなか断ち切れない非常に重要な疾患の1つであり、今や世界の人々にまで浸透しつつある。

本書は総括的に見て、アニサキス症の現在に至るまでの研究者たちの努力が窺われ、本書は日本におけるアニサキス症の集大成であり、今後これらの記述を基にして、その解決すべき方向を正しく示しているものと考えられる。

本書に寄稿された各著者の努力に対して深く敬意を表する。

B5判 144頁 図84 1989

定価 8,000円(税抜き)

Springer-Verlag 刊(医学書院洋書部 ☎03-817-5670)